巻頭特集

豊郷町の今と向き合う若者たち

創設から16年 とよさと快蔵プロジェクト

今年度の改修物件である豊郷町高野瀬の空き家。110人が参加して短期間で改修を終える

「愛する豊郷を元気にしたい」

NPO法人とよさとまちづくり委員会の活動に合流する形で、滋賀県立大学環境建築デザイン学科の学生が立ち上がってから16年。

当初、10人にも満たなかったメンバーは100人を超え、学生による組織的な運営はますます広がりをみせている。

現在改修が進む豊郷町の空き家を訪ねた。

空き家問題の解決をめざし16年にわたり活動を継続

県内最小の地方自治体である豊郷町。今年5月の時点で、人口736 4人、3006世帯が暮らす。国道8号沿いの一部を除いて、ほとんどの地域に田園が広がっている。

「あの家も空き家で、そこの角にある倉庫も今は使われていません。本当に空き家が多いんです」と指さし教えてくれたのは、とよさと快蔵プロジェクトの16代目代表を務める萩原咲楽（はぎはらさくら）さん。まちを5分ほど歩く間に見つけた空き家は、それほど築年が経っているように思えない家ばかりで、多くが昭和中～後期のものだろう。ただし、人が住まなくなった家は朽ちていくのも早い。

さかのぼること20数年前、地域の課題に正面から向き合ったのが、とよさとまちづくり委員会だ。酒蔵、大工、水道設備工などの若手有志が中心となり、空き家問題の解決や地域の交流に取り組んだ。平成12年にNPO法人となり、翌年には酒蔵・岡村本家の辻長蔵を改装し、活動拠点に据えた。

こうした活動から影響を受け、平成16年に滋賀県立大学環境建築デザイン学科の学生がとよさと快蔵プロジェクトを創設する。2年後には古蔵を改修したバー・タルタルーガの運営をスタート。以降、100ほどあった空き家のうち、1年に1棟を改修する形で活動してきた。改修を終えた家は、メンバーが家賃を払って入居するほか、高齢者の交流拠点としても開放されている。

学生主体による組織的運営がまちに活気をもたらす

空き家の改修案は、メンバーをチームに分けたのち、プレゼンテーションによって選考する。学生は実際の現場を見て製図に落とし込み、元の木材や間取りを生かしたプランを練る。物件の間取りや用途によって異なるが、どのプランにも学生ならではの遊びを加えたユニークな発想が生きている。通常、環境建築デザイン学科では新築を前提とした授業が多く、中古住宅のリノベーションに直接関わる機会はほとんどない。近年は他の学科から参加する学生も増え、110人と大所帯になった理由もその楽しさにある。

現在はプロジェクトも組織化し、改修部門、イベント部門、タルタルーガ部門に分かれる。「活動を進めていくうち、地域の皆さんとの交流が増えたんです。祭りやマルシェの企画運営を手伝い、ときには主催もするようになりました」と12代目代表を務めた廣瀬奈々さん。少子高齢化が進む豊郷町において、学生の参加は大きな活気をもたらしている。

平成18年から続くタルタルーガでは、いまも学生手づくりのパスタやドリンクが提供される。お盆はとくに書き入れ時で、今年も多くの近隣住民が訪れた。「タルタルーガ部門は、料理好きなメンバーがシフト制で運営しています。収益は活動費に充てますから、貴重な収入源なんです」と続けた。

第二の故郷・豊郷町の未来を若者たちが変えていく

豊郷町高野瀬の空き家では、今年も合宿による大規模改修が進んでいた。8月末から9月中旬までの短期間に、メンバー全員がシフト制で参加して一気に改修を終える。中をのぞくと、部屋という部屋を学生が埋め尽くしている。

1階では、小上がり、居間、台所、廊下で5～6人ずつが作業中だった。改修には専門工具を用いるため、上級生が下級生を指導する姿がどの部屋でも見られた。「右も左も分からないところからスタートした、多くの先輩方の知恵と技術が受け継がれています」と萩原さん。学生は自主的に厳しいスケジュールを組む。日没後に作業を終えて合宿部屋へ戻ると、疲れで倒れ込むほどのハードワークをこなす。

こうした活動の根幹にあるのは、「なによりも豊郷の人が好き」という思いだ。改修の技術指導や予算管理にあたるNPO法人とよさとまちづくり委員会のメンバーをはじめ、地域の人との関わりを経て、卒業する頃には身も心も豊郷に染まる。卒業生のうち数人は近隣で就職し、豊郷町に暮らしているという。NPO法人とよさとまちづくり委員会の前田広幸（ひろゆき）さんは、「僕たちの活動には後継者がいませんでした。本来、豊郷に関わりのない学生たちが、地域に愛情をもってくれる。これからも豊郷に残ってくれる子が出てくれたらありがたいですね」と期待を寄せる。

「私たちにとっては、ここが第二の故郷です。実際、地元より豊郷のほうが好きなほど。卒業しても何らかの形で関わりたい」と萩原さんはほほ笑んだ。

昨年9月に15周年を迎えた、とよさと快蔵プロジェクト。OBOGも参加した記念イベントでは、プロジェクトの未来について考えた

とよさと快蔵プロジェクト 16代目代表
福元美希さん

とよさと快蔵プロジェクト 16代目代表
萩原咲楽さん

とよさと快蔵プロジェクト 12代目代表
廣瀬奈々さん

宮川倉庫

昨年度に改修した宮川倉庫。外からの見え方にもこだわり、開口部や外壁のデザインをメンバーで協力しながら作り上げた

タルタルーガ

現在も毎週土曜に営業しているBarタルタルーガ。地域の人々と学生との交流の場所にもなっている

ミツマルシェ

ワークショップ

上）今年4月のワークショップ。宮川倉庫の中で、豊郷町の子どもたちと一緒に木材でネームプレートを作った　下）昨年の秋に開催したミツマルシェ。消しゴムはんこのワークショップでは、たくさんの子どもたちが消しゴムはんこで飾りつけしたオリジナル巾着を作った

コンペティション

改修案を決定する最終コンペティションの様子。現役メンバーをはじめ、プロジェクトのOBOGや豊郷町の住民も参加した

文／延原正人　写真／とよさと快蔵プロジェクト提供　デザイン／chica